

猿投窯（さなげよう）に

属（ぞく）する黒笹

東は三好町、豊田市から、西は東郷町、日進市、名古屋市、長久手市、南は刈谷市、豊明市、大府市、北は瀬戸市、尾張旭市にまたがる二十キロ四方の広大に地域にまたがる窯跡群を「猿投窯」と呼びます。この地域の窯業は五世紀後半に名古屋市で始まり、徐々に東に広がっていきましました。黒笹行政区を含む三好町ですぐれた陶器が作成されたのは、九世紀から十一世紀のことです。

今回は、三好町歴史民族資料館のご好意により、八世紀、九世紀、そして十三世紀の三つの時代の陶器をお借りすることができました。

八世紀の須恵器（すえぎ）

- 一 長頸瓶（ちょうけいびん）
- 二 蓋（ふた）
- 三 椀（わん）
- 四 杯（さかずき）

いずれも、筋生（あざぶ）のK-47号窯から出土したものです。まだ釉薬（ゆうやく）いわゆる、うわぐすり）は使われていません。一部に釉薬が塗られているように見える箇所がありますが、焼く時に落ちた灰が自然に溶けて付着したものであると考えられます。

九世紀 全盛期（ぜんせいぎ）

五 椀（わん）

六 皿（さら）

七 段皿（だんざら）

いずれも、筋生（あざぶ）のスコットの号窯から出土したものです。

この時代、黒笹地区（学問的には、三好町・東郷町・豊田市北部を含めてこう呼びます）は釉薬を用いた陶器を大規模に生産する日本で唯一の地域となりました。この地域で生産された質の高い陶器は平城京（へいじょうきょう）奈良の都（や平安京（へいあんきょう））京都の都（を）はじめ、西は山陽（さんよう）、東は東北まで日本各地に運ばれました。

十二世紀 衰退(すいたい)の道

八 小皿(こざら)

九 山茶碗(やまじゃわん)

十一世紀末には、瀬戸(せと)で新しい高級陶器が作られるようになり、また常滑(とこなめ)でも壺、甕、鉢などが生産されるようになると、猿投窯は衰え始めました。このため、これまでの高級路線を転換して、釉薬を用いない安価な製品を大量に生産することに活路を求めましたが、結局、十四世紀には、猿投窯は、その輝かしい歴史の幕を閉じてしまいました。今回展示した山茶碗は、重ねて焼かれた二つが癒着してしまった失敗作です。